ハンセン病医療における国際医療協力現状と その問題点、将来展望

牧野 正直*

国立療養所邑久光明園

〔受付：2002年7月1日〕

国際医療協力が、ハンセン病の分野においても重要な課題であることは言を待たない。我国の国際医療協力に関して少しふりかえてみると、昭和30年代には犀川一夫博士がWHOから台湾に派遣され、当地で活躍されたことや、宮崎松記博士がインドのJALMAにて活躍されたのを引き継ぎ、主として京都大学西占貢教授や中井榮一博士（現愛生園長）がその基礎をつくったことは記憶に新しい。

昭和40年代には大阪大学の伊藤利根太郎教授を中心とする阪大グループがタイ国との協力を行って、一時は高坂健二博士の努力と笹川記念保健協力財団の協力により、ヌードマウスの一大コロニーが維持され、沢山の研究にらい菌が供与されたこともある。韓国における小原安喜子博士（現在はタヒチにおいて活躍されている）ネパールにおける湯浅洋博士の活動も此の頃の事である。

昭和50年代はバングラディシュにおける畑野研太郎氏（現邑久光明園副園長）石田裕氏（現国立国際医療センター、ミャンマープロジェクトチームリーダー）の活動がありまた、中村哲氏のペシャワールにおける活動もこの時期にはじまった。現在進行中のものとしては、和泉眞藏博士のインドネシアにおける遺伝子解析を用いた疫学研究、ハンセン病研究センター松岡正典博士のフィリピンを中心とした研究やタイ、中国などにおけ

る長尾榮治氏（現大島青松園副園長）の活動など枚挙にいとまがない。

また現在、国家間プロジェクトとして国立ハンセン病療養所を中心に、ミャンマーにおいて「ミャンマー国ハンセン病対策・基礎保健サービス改善プロジェクト」というプロジェクトが立ち上がり、現在3年目に入っており、着々と成果が上がって来ている。

その他NGOのプロジェクトや個人的に色々な国（ブラジル、ヴェネゼラ、モロッコ、タイetc）において息の長い活動を続けている方々のいるのも事実である。

一方「我国の国際医療協力は投入した金額の割には、いわゆる実績が上がらない」という批判に対し、色々な方策でもって対応し、この悪しき傾向も徐々に改善されつつあることも事実であろう。

このシンポジウムでは、国際医療協力で現在も積極的にかかわっている何人かの方に登場ねがい、①政府の行っているハンセン病医療協力、NGOの行っているもの、また個人的に継続されているものなどについて現状とその問題点について語っていただく。②長年その受手側の研究者として活動されて来た、外国のドクターに受手側の意見を聞く。③隣接分野である結核の分野で活躍されている研究者より、ハンセン病の分野に対して外から見てどのように見えるか、考えを述べていただくことを行い、最後にお一人お一人にそれぞれは今後、ハンセン病における国際医療協力はどうかあるべきかといった将来展望を述べていただくことを試みた。

*Corresponding author :

国立療養所邑久光明園

〒701-4593 岡山県邑久郡邑久町虫明6253

TEL : 0869-25-0011 FAX : 0869-25-1763

E-mail : makino@komyo.hosp.go.jp

参考文献

- 1) 長尾榮治：開発途上国におけるハンセン病対策への連携的研究、原生科学研究費補助金報告書2002.
- 2) 岩村昇、川村寿一、吉田修 編：東南アジアにおける日本人医師の役割、蟹書房1985.